

タイトル	英語における語順の重要性
著者	上野，誠治
引用	年報新入文学，5：90-125
発行日	2008-12-31

英語における語順の重要性

上野 誠治

一 はじめに

英語は、その歴史を概観すると、屈折的 (inflectional) な古英語時代 (西暦四五〇・一一〇〇頃⁽¹⁾) に始まり、中英語 (西暦一一〇〇・一五〇〇頃)、近代英語 (西暦一五〇〇・一九〇〇頃) と変遷しつつ、次第に分析的 (analytic) な特徴を帯びてくるようになった⁽²⁾。古英語の屈折的な側面は、文字通りヨーロッパからインドに広がる諸言語の「共通の源 (common source)」⁽³⁾であるインド・ヨーロッパ祖語全般の一般的な特徴であり、それを引き継ぐものである。しかし、英語を除く他のインド・ヨーロッパ語族が屈折的な性質を現在に至るまで継承しているのに比べて、英語は時代と共にその特徴を急激に失っていく。もちろん、現在の英語にも、本来の屈折的な特徴は残っているが、それは他のインド・ヨーロッパ語族に属する諸言語の比ではない。

英語が屈折的な言語から分析的な言語に変容した原因として、まず英語それ自身に内在する要因が考えられるが、同じゲルマン系の言語であるドイツ語やオランダ語が屈折的な特徴を残している点を考慮すると、この内的な要因だけでは説明がつかない。英語がこれらの言語と異なるのは、度重なる異民族の侵攻を受けたことと、それに起因する外国語との言語接触があった点である。英語の場合、このような外的な要因も考慮する必要がある。

本稿では、英語が分析的な特徴を帯びるにつれて、いかに語順というものに依存するようになったのかを検討する。また、語順を考慮することで、一見不自然に思われる構文でも、合理的な説明が付けられることを検証する。まず、二節では、古英語の屈折的な性質を概観したあと、三節で英語の基本的な語順であるSVOがどのような経緯で発生したのかを考察する⁽⁴⁾。四節では、疑問文における語順の歴史的変遷を振り返りつつ、それが生成文法理論の枠組みの中でどのように説明されるかを概観する。五節では、事例研究として a certain I don't know what の表現を検討し、どのような経緯でこのような表現が作り出されたのかを検討する。また、それに関連して、同族目的語の成り立ちにも言及することで、英語における語順の重要性を再確認する。六節はまとめである。

二 古英語の屈折的特徴

英語は、元来、現在の Schleswig-Holstein 地方からブリテン島に侵攻した西ゲルマン人の言葉、すなわち北ドイツ語の方言に由来する。比較言語学的に見ると、ゲルマン語派から枝分かれした西ゲルマン

語派に属する言語である。ドイツ語やオランダ語もこの西ゲルマン語派に属する言語であると考えられているため、英語、ドイツ語、オランダ語は比較的類似しており、もし国家の境界線というものがなければ、たがいに方言くらいの違いしか持たない言葉であった可能性もあるであろう。ドイツ語などは、初期の特徴を比較的よく残して現在に至っているが、英語はその後、さまざまな歴史的な外的要因により、独自の変化を遂げることになる。

	古英語		ドイツ語	
	単数	複数	単数	複数
主格	stan	stanas	Stein	Steine
属格	stanes	stana	Steines	Steine
与格	stane	stanum	Steine	Steinen
対格	stan	stanas	Stein	Steine

表1 英独語の屈折比較

まず、古英語とドイツ語の類似性を名詞の語尾屈折で確認してみよう。

古英語やドイツ語の名詞に関する共通の特徴として、①男性、女性、中性の文法的性(grammatical gender)を持つこと、②主格(nominative)、属格(genitive)、与格(dative)、対格(accusative)の4つの格(case)を持つこと等が挙げられる⁽⁵⁾。表1は古英語の名詞stan(‘stone’)とそれに対応する現代ドイツ語のSteinの変化表である。太字の部分が屈折語尾であるが、単数の場合、共通して、属格と与格の語尾はそれぞれ、*-es, -um*である。また、単数主格と単数対格に語尾がないこと、換言すると、ゼロ接辞を持つ点も共通である。他方、複数の場合は、古英語が、主格から順に、*-as, -a, -um, -as*であるのに対して、ドイツ語は、*-e, -e, -en, -e*とややおとなしい変化となっている。複数語尾に関しては、両言語に共通点はないが、複数主格と複数対格が同じ語形を用いる点は共通して

いる (stanas-stanas, Steine-Steine)。

次に、古英語において、ある名詞的な表現が同じ語形を取る場合、それが主語なのか目的語なのかという、当該の文中での文法関係はどのように示されるのかを概観する。そこでまず、定冠詞に当たる指示詞の変化表を表2として掲げる。

	古英語			
	単数			複数
	男性	女性	中性	þa
主格	se	seo	þæt	
属格	þæs	þære	þæs	
与格	þæm	þære	þæm	
対格	þone	þa	þæt	
具格	þy	þære	þy, þon	þa

表2 指示詞

	単数	複数
主格	se stan	þa stanas
属格	þæs stanes	þara stana
与格	þæm stane	þæm stanum
対格	þone stan	þa stanas

表3 se stan の屈折

古英語やドイツ語では、指示詞（あるいは定冠詞）と名詞からなる名詞句が構成される場合、両者の間で性 (gender) ・ 数 (number) ・ 格 (case) を一致させなければならない。したがって、the stone に相当する表現は、古英語の場合、文中の文法的役割に応じて、表3のように語形を変化させることとなる⁽⁶⁾。

すなわち、単数の場合は、主格が se stan、対格が þone stan となるので、一般的には前者が主語、後者が目的語となり、両者は指示詞（あるいは定冠詞）によって明確に区別される。しかし、複数の場合は、主格、対格ともに þa stanas となる

ために主語と目的語の区別はこの名詞句自身からは不可能である。

すで見たとように古英語とドイツ語は非常に豊かな屈折的特徴を保持しているが、現代英語になるとその姿は一変する。もちろん、現代英語になって急変したのではなく、中英語、近代英語を経るにしたがつて、徐々に変化してきた結果である。表4は現代英語における stone の変化表である。現代英語の格には通常、主格 (nominative)、所有格 (possessive)、目的格 (objective) の3つが挙げられるが、表4では比較のため与格と対格を用いてある。また、所有格の代わりに属格という術語を用いることにする。

	現代英語	
	単数	複数
主格	stone	stones
属格	stone's	stones'
与格	stone	stones
対格	stone	stones

表4 stone の屈折

現代英語では、与格は間接目的語の目的格、対格は直接目的語の目的格に対応するが、語形上の区別はない。また、定冠詞はいかなる場合であっても、つまり、どのような性・数・格であっても常に the であるので、単数主格・与格・対格はいずれも the stone、また複数主格・与格・対格はいずれも the stones となる。したがって、これらの表現に関しては、語形上、主語と目的語の区別は不可能と言うことになる。また、間接目的語と直接目的語の区別もできなくなってしまった。

このように、英語は次第に屈折語尾を消失させたために、文法関係を語形で示すことができなくなり、その結果として、前置詞や語順の果たす役割が大きくなっていった。たとえば、「その石に」という意味の場合、古英語では stane 一語で十分だったのが、to the stone というように、前置詞 to を添える必要が生まれた。あるいは、SVOの文型の時には、動詞の直後の位置の名詞句が（直接）目的語であり、SVOOの文型の時には、同じく動詞の直後に置かれた名詞句が間接目的語となる、というように語順への依存度が

相対的に増すことにもなった。前置詞の発達や語順の確立・固定化および、その重要性は屈折語尾消失による負の側面を補完するための代替措置であったと言える。

三 英語の基本語順の発達

比較言語学の分野では、英語が属するゲルマン語派が分化する以前のインド・ヨーロッパ祖語において、その基本語順はSOVであったと考えられている。古英語は前節で概観したように、屈折的な特徴を保持していたため、語そのものに性・数・格の特徴が現れる。したがって現代英語に比べると、その語順は比較的自由であった。しかし、中尾・児馬(1990: 193)は、「初期の英語でさえ、好まれる語順の一般的な傾向は観察できる」と指摘し、Alfredの散文で四〇%がSVOであったと述べている。また、渡部(1983: 112)や橋本(2005: 176)は、Fries(1940)の研究を紹介して、上のような表(一部改変)を提示している。

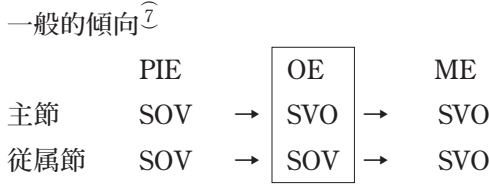
表5 SVO 語順の変遷

	c1000	c1200	c1300	c1400	c1500
S+O+V	52.5%	53.7%	40+%	14.3%	1.87%
S+V+O	47.5%	46.3%	60-%	85.7%	98.13%

Friesは主節と従属節の区別を考慮していないので、中尾・児馬が提示した割合とは異なるが、表5から西暦一〇〇〇年頃、すなわち古英語時代にはすでにSVOの語順が四十七・五%を占めていたことがわかる。SOVがやや優勢なのは、それがインド・ヨーロッパ祖語の基本語順の名残を留めるものであり、また従属節の語順が古英語にあっても依然、SOVが基本語順であったためと

思われる。その後、SOVとSVOの占める割合は徐々に逆転していき、西暦一四〇〇年頃には、圧倒的にSVOが多くなり、西暦一五〇〇年頃に至ってはほとんどがSVOの語順を取るようになったことが明白である。

また、主節に関しては、古英語時代からSVOへの変化が確認できるが、その一方で、従属節においては依然としてSOVが支配的だったと考えられている。まとめて図示すると、(1)のようになる。



ここで注目すべき点は、まず第一にインド・ヨーロッパ祖語では主節と従属節を問わず、基本語順がSOVであったものが、古英語では主節においてのみ、現代英語と同じSVOに変化した点である。第二には、何故そのような変化が主節においてのみ起こったのかという点である。また、第三として、インド・ヨーロッパ祖語以来保持された来た従属節におけるSOVの基本語順が何故、中英語時代に至って主節と同じSVOへと変化したのか、という点である。以下では、この三点について、中尾・児馬(1990: 196ff.)の議論を踏まえて考察していくことにする。

まず、古英語では、(2)において、名詞 *mann* は、主格と対格が同形になるので、*mann* の語形からはそれが主語とは判断がつかない。しかし、*beran* は弱変化名詞 *bera* の対格の形であるので、語形から目的語となることがわかる。また、それぞれの名詞に付加されている指示代名詞(現在の定冠詞に相当する)の語形がそれぞれ、主格(*se*)と対格(*þone*)という文法関係を示すので、結局、*se mann* が主語で、*þone beran* が目的語であることの見当が容易につくのである。

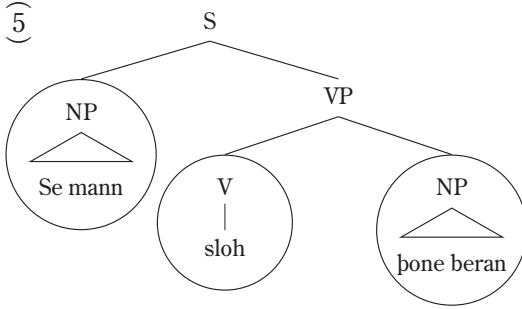
- (2) Se mann sloh pone beran.
the man slew the bear

しかし、現代英語では、いずれの場合も *the* になるので、語順が固定されていない限り、その文法関係は自明とはならない。すなわち、現代英語においては、動詞を中心として、その前に来る名詞句が主語であり、その後に来る名詞句が目的語である、つまり SVO の語順を取ることがわかって初めて、*the man* が主語であり、*the bear* が目的語であることがわかるのである。一方、古英語は豊かな格体系を持ち、格の情報が指示代名詞および名詞に付随されているため、可能性としては、同じ意味内容を表しうるものとして、(3) の 6 通りの語順が考えられることになる⁽⁸⁾。

- (3) a Se mann sloh pone beran.
b Se mann pone beran sloh.
c Pone beran se mann sloh.
d Pone beran sloh se mann.
e Sloh se mann pone beran.
f Sloh pone beran se mann.

ただし、語順が比較的自由的であると言っても、指示代名詞と名詞は構成素(constituent)を成すので、並べ替えは、(4)または(5)の構成素構造を反映する(3)の語順に限られる。

(4) [_S [_{NP} Se mann] [_{VP} [_V sloh] [_{NP} pone beran]]]



以上見てきたように、比較的自由的な語順を持つ古英語ではあるが、それが次第に基本語順としてSVOに固定されていく要因が古英語自体に内在されていたことを示す事実が存在する。(2)の場合は、指示代名詞の *se* と *pone* の違いが文法関係を決定する決め手になったのであるが、古英語においては、上野(1997:3)が指摘するように、まだ指示代名詞の機能が現代に比べると未発達であったため、常に名詞に付加されるとは限らない。つまり、文法関係の決め手となる指示代名詞を伴わない名詞単独の表現も実際には多く見られたのである。また、*stan* がそうであったように、古英語の名詞には主格と対格が同形となる場合が非常に多い。

(6)

主格・対格		単数	複数
	cyning	cyningas	'king'
	dæg	dagas	'day'
	scip	scipu	'ship'

(6)に挙げられた名詞は単数、複数いずれの場合でも、主格と対格が同形である⁽⁹⁾。したがって、このような名詞が指示代名詞を伴わずに単独で生じた場合には、文脈や語順に依存しない限り、その文法関係は不明のままということになってしまう。また、(2)で決め手となった指示代名詞も表2に例示したように、中性・単数の主格と対格は同じ *paet* であり、複数の主格と対格も同じ *pa* であるから、その場合、指示代名詞も文法関係の決定には役立たないことになってしまうのである。中尾・児馬(1990: 196)は次のような例文を提示して、このことを説明している。

(7) ... *pa hergodon hie up on Supseaxum... & pa burgware hie gefliemdon.*

('then they made raids on the South Saxons... and the city dwellers they put to flight')

この問題となるのは、後半の *pa burgware* と *hie* の解釈である。前半の *Supseaxum* を指す *pa burgware* は *the city dwellers* の意味で、指示代名詞、名詞ともに複数・主格または複数・対格である。*hie* については、現代英語訳では *they* となっているが、本来、三人称複数の主格または対格の形である

から、themと解釈する可能性もある。いずれにしても、pa burgwareとhieは主格と対格の区別がないために、この箇所は、本来多義的であり、次の2通りの解釈（の可能性）が存在する。

- (8) a they put the city dwellers to flight
b the city dwellers put them to flight

(8) aはhieが主語で、pa burgwareを目的語とする解釈で、(8) bは逆に、pa burgwareが主語で、hieを目的語とする解釈である。

さて、問題の箇所の語順に注目してみると、2個の名詞句が並び、その後に関詞が続いている。すなわち、NP + NP + Vの語順になっている。一見すると、この語順はSOVと考えられるが、もしそうであれば、その解釈は(8) bとなる。しかし、文脈上、(7)の現代語訳に示されているように、適切な解釈は(8) aでなければならない。もしそうだとすれば、ここの語順はOSVとなるが、これはここまですべて考察してきたいずれの語順とも異なっている。

この語順に見られるような、目的語が主語の前に生起する構文は、現代英語にも見られる話題化(Topicalization)という操作を受けた結果であると考えられる。

- (9) John likes bananas. SVO
(10) Bananas, John likes. OSV

(10)は、動詞 *likes* の目的語 *bananas* が主語 *John* を越えて前置された構文である。ここに生起する2つの名詞句は語形だけでは、主語とも目的語とも言えない。その情報を表すような屈折が一切ないためである。その意味で、(7)の *hie* や *pa burgware* と事情は同じである。この文においては、仮に名詞句が動詞の前に連続して並んで生起したとしても、通常の常識の世界では、「*John* はバナナが好き」であって、その逆ではあり得ないため、それほど問題にはならないかもしれない。しかし、実際にはそのような常識に依拠して文法関係が把握されているわけではない。なぜなら(11)の場合には、そのような常識が決して有用ではないからである。

(11) *John, Mary loves.*

(11)は、実際には「*Mary* は *John* を愛している」という解釈しか持たないが、何故 *Mary* が動詞 *love* の主語で、*John* がその目的語と分かるのであろうか。

仮に英語がSOV型の言語であると仮定してみよう。すると、「*Mary* は *John* を愛している」という意味の文は、*Mary John loves* という語順となるが、目的語の *John* を話題化して主語 *Mary* を越えて前置すると、*John Mary loves* となる⁽¹⁰⁾。今、想定しているのはSOV型の英語であつたから、話題化の結果として産出された文もSOVの文型で解釈される可能性があり、その場合、「*John* は *Mary* を愛している」となり、当初の意味とは逆になってしまう。まとめると次のようになる。

(12) 仮定Ⅰ：英語はS O V型言語である

a Mary John loves. 「MaryはJohnを愛している」

S O V

b John Mary ____ loves. (話題化)

↓

c John Mary loves.

O S V

S O V

「JohnはMaryを愛している」?

次に、英語がS V O型の言語であると仮定してみよう。その場合、「MaryはJohnを愛している」という意味の文は、Mary loves Johnの語順となり、目的語のJohnを話題化するJohn Mary lovesという文ができあがる。ここで想定しているのはS V O型の英語であるから、その文型が適用されることになるが、John Mary lovesはその文型に合致しない。しかし、Mary lovesの部分はS Vに相当するので、残りのJohnはOになることが予測される。まとめると、次のようになる。

(13) 仮定Ⅱ：英語はS V O型言語である

a Mary loves John. 「MaryはJohnを愛している」

S V O

b John Mary loves _____. (話題化)

o John Mary loves. [JohnをMaryは愛している]

O S V

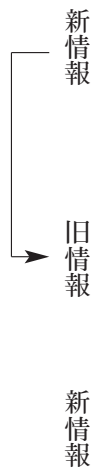
以上のことから、仮定Ⅰによると話題化の前後で文の意味が変化してしまう可能性があるのに対して、仮定Ⅱではそのような変化が起こる可能性はまったくなく、話題化による微妙なニュアンスの違いを別にすれば、一義的に意味が決まることが分かる。したがって、基本的に屈折語尾を持たない現代英語はSVO型の語順を取る方が好都合ということになる。同様のことは、(7)の古英語についても言える。(14)として再掲する。

(14) ... pa hergodon hie up on Subseaxum... & pa burgware hie gefliendon.

すでに述べたように、前後の文脈から後半の適切な解釈は、pa burgwareが目的語で、hieが主語である。ここで、「目的語＋主語＋動詞」の語順を取っているのは、目的語が話題化されたためであると考えられる。また、そもそも何故このような話題化の操作が適用される必要があったのかと言えれば、前半に出てくるSubseaxum (the South Saxons)を話題として後半が語られているのであり、そこには前半の新情報(New Information)を後半で旧情報(Old Information)として受け、さらに新情報が述

べられるという典型的な情報の流れがあるからである。

(15) ... Subseaxum... & pa burgware hie gefliendon.



そうすると、話題化の操作が適用される前の文は、もし古英語がSOV型であれば hie pa burgware gefliendon (= (16)^a) となり、もしSVO型であれば hie gefliendon pa burgware (= (17)^a) の語順とこのことになるであろう。そこで、この2つの可能性を仮定Ⅲと仮定Ⅳとして検証してみよう。

(16) 仮定Ⅲ：古英語はSOV型言語である

a hie pa burgware gefliendon.

S O V

b pa burgware hie _____ gefliendon. (話題化)



c pa burgware hie gefliendon.

O S V

S O V

この場合も、(12)と同様、話題化によって生じた *pa burgware hie gefliendon* は、*O S V* の解釈が期待されるが、同時に *S O V* の解釈も可能になるため、結果的に多義的となってしまう。しかし、*S V O* 型を想定する (17) では、(13)と同様、そのような多義性は基本的に起こらない。

(17) 仮定Ⅳ：古英語は *S V O* 型言語である

a *hie gefliendon pa burgware.*

S V O

b *pa burgware hie gefliendon* _____.

(話題化)



c *pa burgware hie gefliendon.*

O S V

以上のように、古英語の基本語順が *S V O* であれば、話題化の適用を受けても多義性を生じることはない。多義性を生じないような言語はないが、解釈に負担をかける多義性はできるだけ少ない方が効率的かつ経済的であるとすれば、英語が古英語時代以降、インド・ヨーロッパ祖語の *S O V* の語順を捨て、*S V O* の語順を採用するに至った背景には、以上のような理由があったと考えられる。河崎 (2006 : 61) は「この説明の仕方は、幾分メカニカルに過ぎ、理論的すぎるかもしれない」と指摘しているが、一方

で「このように個別言語のレベルを超え、語派・語族単位というかなり一般化したレベルでの説明を志向しているという点で注目に値する」とも述べている。本節では古英語と現代英語しか取り上げていないが、SOV型からSVO型への移行はゲルマン語派に限られたことではなく、ヨーロッパの諸言語に広く見られるものである。その中でも、特に英語はほとんど屈折的特徴を捨ててしまったため、文法関係の決定において語順に頼らざるを得なくなり、そのため語順がより重要な役割を担うようになったと考えられる。

次に、第二の問題、すなわち何故SOVからSVOへの変化が主節においてのみ起こったのかという点を考察する。この変化を促したのは話題化という操作であるが、Emonds (1970, 1976) は、分詞前置 (Participle Preposing)、方向副詞前置 (Directional Adverb Preposing)、否定構成素前置 (Negated Constituent Preposing) などによってルートの変形 (Root Transformation) と呼ぶ。また、このルート変形は主に主節において適用されるため、主節現象 (Main Clause Phenomena) とも呼ばれる。主節現象とは「主節における要素の移動」であり⁽¹⁷⁾、その名の通り、原則として主節にしか起こらないものである⁽¹⁸⁾。

- (18) a These steps I used to sweep with a broom.
b Each part John examined carefully.
c Our daughters we are proud of.
d Poetry we try not to memorize.

- (19) a *Have I shown you the broom (that) these steps I used to sweep with?
 b *I fear (that) each part John examined carefully.
 c *We are going to the school play because our daughters we are proud of.
 d *Are you aware (of the fact) that poetry we try not to memorize?

(19)の各文が非文であるのは、従属節の中で、話題化規則が適用されているからで、もしこれが主節であれば(18)に示されるように文法的である⁽¹³⁾。同様に、方向副詞前置に関しても、主節であれば問題ないが、その規則が従属節で適用されると、非文になってしまう⁽¹⁴⁾。

- (20) a In came John!
 b Down the street rolled the baby carriage!
 c Away they ran!
 d Up trotted the dog!

- (21) a *I noticed that in came John.
 b *The fact that down the street it rolled amazed her.
 c *It seems that away they ran.
 d *I was surprised when up trotted the dog.

もし、話題化のような要素の移動がそもそも主節でしか起こらないものであるとすれば、(7)におけるような多義性の問題も主節でしか起こらないはずである。逆に言えば、そのような多義性の問題は従属節では本来起こらないはずのものである。そうであるとすれば、従属節においては語順をわざわざSOVからSVOに変更する理由がないことになる。そもそもそのような語順の変更は多義性の問題を回避するための方略であったのである。

一方、英語よりも保守的なドイツ語では、次の例が示すように主節ではSVOとなっても、従属節では依然としてSOVのままである。(英訳については(26)、(27)を参照。)

(22) Heinrich liebt die Frau.

S V O

(23) Ich weiß, daß Heinrich die Frau liebt.

S O V

主節の(22)ではSVOの語順が選択されているが、(23)の従属節、すなわち daß 節内では依然SOVの語順となっている。この従属節の語順は、インド・ヨーロッパ祖語に遡る、伝統的な語順であり、それを現代まで継承していることになる。

同様に、この主節と従属節における語順の違いは古英語にも見られる。ただし、Mitchell and Robinson (2001: 64) は “The order S...V. is most common in subordinate clauses” と述べて(24) (25) などの

例を挙げているが、他方で“the order S...V. does not certify that a clause is subordinate”とも指摘している。本節の議論に沿って換言すれば、従属節ではSOVが最もよく見られる語順であるが、SOVであれば従属節であるということが確認されるわけではない、という指摘である。前述のFriesの研究からも分かるように、古英語では、主節にSOVの語順が現れることもあるのだが、それはインド・ヨーロッパ祖語の基本語順の名残を留めた結果と考えられる。

(24) se micla here, be we gelyrn ymbe spracon

O S V

(‘the great army which we spoke about before’)

(25) gif hie ænigne feld secan wolden

S O V

(‘if they wished to seek any open country’)

(24) は *se micla here* を先行詞とする関係節を含む例であるが、*se micla here* は本来は前置詞 *ymbe* の目的語である。したがって、厳密な意味ではSOVの語順とは言えないが、いずれにしても動詞 *spracon* が主語 *we* のすぐ右隣ではなく節末に生起する点に注目したい。また、(25) は条件節であるが、主語 *hie* に後続する部分が目的語 *ænigne feld* + 動詞 *secan* の語順になっている。

では、何故この伝統的な従属節の語順であるSOVが中英語以降、主節同様にSVOへと変化して現

在に至ったのか。これが第三の問題点であった。

(22)、(23)のドイツ語に相当する現代英語では、主節と従属節を問わず、語順はSVOとなっている。

(26) Henry loves the woman.

S V O

(27) I know that Henry loves the woman.

S V O

中尾・児馬(1990:197)は「主節に起こった変化がどのように従節に及んでいったのかについては、今後の研究課題である⁽¹⁵⁾」と述べているが、一言で言えば主節の語順との「類推(analogy)」が作用したと見るのが自然であると思われる。

たとえば、名詞の複数形を例に挙げると、古英語時代には *stanas* (*stan* の複数主格・対格、以下同じ)、*naman* (*nama*)、*fet* (*tot*)、*cild*, *cildru* (*cild*) などさまざまな形態があったが、やがて、大多数の名詞が *-(e)s* という複数語尾を付加することによって複数形を作るようになった。「名前」に相当する語の複数形は *naman* ではなく *names* となり、「本」の複数形は *bec* ではなく *books* となった。複数形の作り方に、*-(e)s* を付加するという大きな流れが形成されたときに、類推作用が働き、結果的に大部分の名詞が同一歩調を取ったのである。同様のことは動詞の規則動詞化にも見られる。古英語時代には強変化動詞、弱変化動詞などがあったが、強変化動詞の多くが過去形、過去分詞形に *-(e)d* を付ける規則動詞に

変化した。表6は動詞 *help* に相当する古英語、現代英語、ドイツ語の場合の活用である。現代英語の *help* は規則動詞になっているが、古英語では母音交替 (Ablaut) を伴う強変化動詞であった。なお、ドイツ語は古英語と同じ強変化の活用パターンを現在まで保持し続けている。

語順に関しても、この名詞の複数形や動詞の活用の場合と同様、類推作用の結果、主節と従属節を問わず、同じ SVO の語順を取るようになったと思われる。

四 疑問文における語順の変化

本節では、疑問文における主語と(助)動詞の倒置および *do* 挿入の有無について検討する。まず、古英語では、疑問文を作る際に迂言的 (periphrastic) な *do* は用いられず、もっぱら主語と(助)動詞の倒置によって表されていた⁽¹⁶⁾。

	不定詞	過去形	過去分詞
古英語	helpan	healp hulpon	holpen
現代英語	help	helped	helped
ドイツ語	helfen	half	geholfen

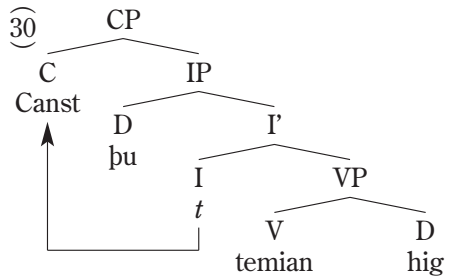
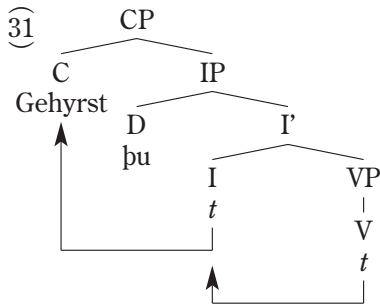
表6 動詞の活用

(28) Canst pu temian hig? ('Know you how to tame them?')

(29) a Hwær eart pu nu, gefera? ('Where are you now, comrade?')

b Gehyrst pu, sælida? ('Do you hear, sailor?')

(28) の派生を樹形図で示すと(30) のようになる。Canst は過去現在動詞 *cunnan* の二人称単数現在の形である。本来 'know how to' の意味の動詞であるが、次第に 'be able, can' の助動詞的な意味を持つよう



になったと考えられている。ここでは、IPの主要部Iの位置から *bu* を越えてCPの主要部Cの位置へ移動したと考えることにする。一方、そのような助動詞を含まない(29) bでは、(31)に示すように動詞 *gehyrst* は動詞Vの位置からIPの主要部Iの位置に移動した後、*bu* を超えてさらにCPの主要部Cに移動したと考えられる。

以上のように、古英語では疑問文を作る際に主語と(助)動詞が倒置されるが、それが可能になるためには疑問文を作る直前の段階で、(助)動詞はIPの主要部Iの位置になければならない。(28)のように助動詞が含まれる場合には、最初からこの位置に基底生成され、一致素性 (agreement features) や時制素性 (tense feature) を担う⁽¹⁷⁾。一方、(29) bのように本動詞しか含まれない場合は、VPの主要部Vの位置に基底生成された動詞はいったんIPの主要部Iの位置に移動し、そこで一致素性や時制素性が付与される。あとは(28)の場合と同様、疑問文を作るために、主語 *bu* を超えてその前に移動するのである。

このように(助)動詞が主語の前に移動して疑問文が作られる派生は、初期近代英語(例文はShakespeare)にも見られる。(33)は、その現代英語による言い換えである⁽¹⁸⁾。

(32) a Saw you my master?

b Heard you this, Gonzaro?

c Speakest thou in sober meaning?

d Came you from the church?

(33) a Did you see my master?

b Did you hear this, Gonzaro?

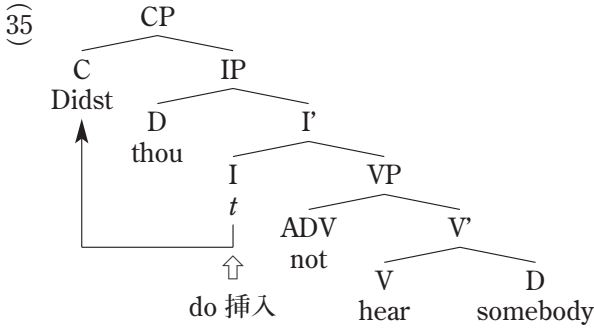
c Do you speak in sober meaning?

d Did you come from the church?

(28)～(32)の例は、迂言的 *do* を用いずに表現されるが、中尾・児馬(1990:73)によれば、そのような迂言的 *do* は古英語にはまったく見られず、中英語では散見されるもののまだ確立されてはいなかった。ただし、初期近代英語になると、(34)のような迂言的 *do* の使用も徐々に多くなってくる。(34)では、(33)と違って、迂言的 *do* が過去時制に加えて、*did* という屈折接辞を付加されている点に注意する必要があると思われる。つまり、*didst* は過去時制を表すと同時に、二人称単数主語と一致することを表している⁽¹⁹⁾。

(34) Didst thou not hear somebody?

(35)は(34)の構造を示したものであるが、(31)とは異なり動詞 *hear* はV Pの主要部Vの位置にとどまり、上のIの位置には繰り上がらない。その場合、一致素性や時制素性を担うべき要素がないことになるので、その事態を打開するために $\bar{p}_0$ が挿入されると考えられる。その結果、I Pの主要部Iの位置に挿入された迂言的 $\bar{p}_0$ はこの位置で一致素性や時制素性を付与され、疑問文を作る際に、主語の *thou* を超えて、さらに上のC Pの主要部Cの位置へ移動するのである。



ではなぜ、(31)の場合は動詞がI Pの主要部Iの位置へ繰り上がるのに対して、(35)や現代英語ではVの位置にとどまるのであろうか。それは、Chomsky (1995 : 232) が示唆するように、古英語などでは一致素性や時制素性が「強く (strong)」、反対に現代英語では「弱く (weak)」からである。そしてその場合、強い素性を持つ動詞だけがVからIへ移動可能なであると仮定することができる。そうすると、(28)、(29)の *canst*, *eart*, *gehyrst* などは強い素性を持ち、一方、(33)の *see*, *hear*, *speak*, *come* などは弱い素性を持つことになる。両者の違いは、一致素性や時制素性が語の形態に反映されているか否かにあることは明らかである。

したがって、(35)において、もし動詞が *hear* ではなく *heardest* のような形態であれば、その語形から明らかのように、二人称単数で過去時制を担うため、強い素性を持つことになり、Iへ移動される資格を持つ

たであろう。そして、疑問文を作るために、さらにCへ繰り上がり、*Heardest thou not somebody?*と表現されていたことであろう。しかし、実際には *hear* が弱い素性しか持たなかったために、Vにとどまることになったが、それではIの位置で付与あるいは照合されるはずの一致素性や時制素性の担い手がないことになる。すでに述べたように、この事態を回避するためにIに挿入されることになったものが、迂言的 *do* である。この場合、*do* は期待通り、一致素性(二人称単数)や時制素性(過去)を反映する形態 *didst* になり、疑問文を作る際に、IからCへ移動したのである。

なお、疑問文の語順は、迂言的 *do* の出現する前のVSOから *do* + SVOとなり、確立した語順SVOを維持することが可能になったとも考えられる。

(36) a Saw you my master?

V S O

b Did you see my master?

S V O

五 語順の力

本節では、英語における語順の重要性を示す事例を取り上げ、検証することにする。上野(2008: 164)は、次のような文について考察している。

- (37) She has a certain I don't know what.

この文は、元々、フランス語からの借用語を含む表現 *She has a certain je ne sais quoi*. をすべて平易な英語に置き換えたものであるが、この種の表現は決してごく希なものというわけではなく、比較的頻繁に使用されていることがインターネットを利用した Google 検索からも明らかである。以下はその検索例である (27)。

- (38) Well-known British political opportunist and tabloid academic Michael Portillo has always possessed **a certain I don't know what**.
- (39) Although I will admit that for some reason (as Ernest would say in English: **A certain I don't know what**) some classical music AAC's encoded with iTunes at 192 kbps sounded at times a tad better than MP3's ripped with iTunes at the aforementioned settings.
- (40) These lines amount to saying: Besides the fact that these creatures wound me with the thousand graceful things they explain about you, there is **a certain "I-don't-know-what"** that one feels is yet to be said, something unknown still to be spoken, and a sublime trace of God as yet uninvestigated but revealed to the soul, a lofty understanding of God that cannot be put into words.
- (41) You lack a **certain "I don't know what"**

- (42) It possesses what the French call **a certain “I don’t know what”** that is hard to describe in mere words ...
- (43) For most of us, anchovies are just a punchline involving pizza and truly, truly disgusting, but they do have a nice, salty, robust flavor that adds **a certain I-don’t-know-what** (translation: *je ne sais quoi*) to a dish.
- (44) If you think this tutorial sucks or lacks **a certain...I don’t know what**, register for our wiki and make it better.
- (45) What a great talent he is. It’s wild, because when I’m working with him, there’s a certain energy, there’s **a certain ... I don’t know what’s** going to happen.
- (46) I would say Squirrelly Dozen... It avoids the whole fur motif entirely... though Dicing Dozen has **a certain, I don’t know what**.

ここで問題にしたのは、a certain I don’t know what という表現である。certainは通例、形容詞または代名詞の用法しか持たない。形容詞の用法で典型的なものは以下のようなものである。(47)は形容詞の叙述的用法、(48)は形容詞の限定的用法、(49)は代名詞の用法である⁽²¹⁾。

- (47) I am certain he will come.
- (48) He had a certain charm.

(49) *Certain of the members declined the invitation.*

しかし、a certain I don't know what においては、certain の前に不定冠詞があり、その後には I don't know what という何らかの句が続くことから、certain が代名詞とは考えにくい。実際、その解釈も不可能であるように思われる。もし、そうだとすると、certain は形容詞で、(48)の charm と同じ位置を占める構成素 I don't know what はその被修飾語ということになり、名詞句でなければならない。中尾・児馬 (1990 : 198) が述べているように、英語では、古英語以来、形容詞十名詞句の語順が基本語順であり、それが確立されているからである。

先に示した検索例に見られる a certain I don't know what に相当する表現は、実に様々であるが、特徴ごとにまとめると、少なくとも以下のような使い方がありと思われる。

- (50) a a certain I don't know what : (38) (39)
- b a certain "I-don't-know-what" : (40)
- c a certain "I don't know what" : (41) (42)
- d a certain I-don't-know-what : (43)
- e a certain ... I don't know what : (44) (45)
- f a certain, I don't know what : (46)

(50) a は (37) と同じく、ただ a certain に I don't know what を並列させたものであるが、(50) b、c、d は、a certain に後続する部分がハイフンで結合されていたり、引用符に入れられていることから、明らかにひとつのまとまり、すなわち構成素を成していることを示していると考えられる。既に述べたように、certain が形容詞であるとすれば、この構成素は名詞句となるはずであり、そのことを明示するための手段がハイフンであり引用符なのであろう。

一方、(50) e、f は、ピリオドを重ねたり、カンマを挿入することで、a certain から I don't know what の部分を切り離すことが意図されているように思われる。このことから、問題の表現は、話者が「何らかの (a certain) ー」と言いかけて、それに後続する名詞句の適切な表現が思いつかずに、「それが何かはよくわからないのだが (I don't know what)」と続けたことを示唆するように思われる。すなわち、話者の評言 (comment) である。しかし、不定冠詞を伴った形容詞 certain の修飾する名詞句がない、つまり表現が完結していないために、次第に I don't know what が名詞句の位置づけを獲得することになったのである。つまり、話者の評言から格上げされて、名詞句となり、形容詞 certain の被修飾語となり、主節の文を構成する重要な位置を占めるに至ったと考えられる⁽²²⁾。

これと関連して、葛西 (1980: 12) は (51) の同族目的語を含む表現を (52) との関連性から考察している。

(51) He smiled a nervous smile.

(52) He smiled, a nervous smile.

動詞 smile は本来、自動詞であるから目的語は取らない。つまり、(52)で端的に示されているように、He smiled の部分だけで表現としては完結している。したがって、カンマをはさんで加えられている a nervous smile は「追加表現 (after-thought⁽²³⁾)」ということになる。葛西は、この追加表現が、動詞の直後の位置を占めているため、「目的語」に格上げされたものこそが、同族目的語であると論じ、「同族目的語」はすぐれて「語順の力」の問題なのである」(p. 16)と述べている。もちろん、この場合の語順とは SVO である。

われわれが考察している a certain I don't know what という表現における I don't know what は追加表現ではなく話者の評言であるという違いはあるものの、本来切り離されていた部分が確立されている語順(すなわち形容詞十名詞句)に沿う形で組み込まれ、文の重要な部分を担うようになったと考えて差し支えないと思われる。この場合は、形容詞十名詞句という語順である。このように考えると、a certain I don't know what⁽²⁴⁾ (50)^e、f のような表現が基になって、ハイフンや引用符の利用を経て出来た表現であると思われる。

六 まとめ

英語は、ドイツ語などに比べると、その歴史的変遷には、非常に劇的なものがあつたように思われる。屈折語尾の喪失や語順の変化などはそのよい例である。そのような変遷は、英語の内部に自らが変わろうとする特性を持ち合わせていたことに加えて、英語を取り巻く歴史に原因があつたと思われる。

また、屈折語尾の喪失は、前置詞や助動詞の発達を促し、さらに語順の重要性を増すきっかけとなった。インド・ヨーロッパ祖語は、SOVが基本語順であったが、そこから枝分かれたゲルマン語派、とりわけその中の英語は、名詞の主格と対格の語句が同形となることが多かったために、語順を固定して、文法関係を同定していく必要が出てきた。本稿では、話題化という現象を通してみたとき、英語にとっては元々のSOVよりもSVOの語順の方が、経済的・効率的であることを、中尾・児馬(1990)の議論を踏まえ再確認した。この語順の変化が、主節と従属節とで少し時間差を生じたのは、話題化が主節現象のひとつであり、原則、主節でしか起こらないということが原因であった。結果的には、少し遅れてSVOの語順が従属節内でも一般的となるが、その要因として類推作用が働いた可能性を指摘した。

さらに、名詞句内の「形容詞十名詞」という固定された語順から見た a certain I don't know what という表現の分析やSVO語順という観点から見た同族目的語の研究を通して、英語における語順の重要性を再確認した。

(うえの せいじ・北海学園大学教授)

[註]

- (1) 英語の時代区分は便宜的なものである。研究者の考え方によって異なる場合がある。ここでは、古英語の始まりを西暦四五〇年としているが、その頃に現在のイギリス人の祖先とも言えるアングル人、ジュート人、サクソン人の、いわゆるゲルマン人がブリテン島に進出し始めたという歴史に基づくものである。他には、彼らの言語が文献に初めて登場する西暦七〇〇年頃を古英語の始まりとする考え方もある。
- (2) インド・ヨーロッパ語族に属する言語の屈折的な性質と日本語のような膠着的な性質を合わせて、総合的(synthetic)な性質と呼ぶこともある。
- (3) ウィリアム・ジョーンズ卿(Sir William Jones)が一七八六年にアジア協会で行った記念講演の中で使った言葉。
- (4) 英語には、SV、SVC、SVO、SVOO、SVOcという、いわゆる五文型を典型とする語順が存在するが、以下では英語の基本語順について言及する際には、SVOで代表させることにする。
- (5) 指示代名詞や疑問詞は、さらに具格(instrumental)を持つ。
- (6) 古英語stanは男性名詞である。
- (7) PIE、OE、MEはそれぞれインド・ヨーロッパ祖語(Proto-Indo-European)、古英語(Old English)、中英語(Middle English)の略である。
- (8) もちろん語順が異なれば、微妙な意味や機能の違いを持ちうるはずである。本稿では、この点についてはこれ以上立ち入ることをしない。ここでは、動詞で表される出来事の主体と客体が単に同一であることを確認するに留める。
- (9) 河崎(2006: 60)は、古ゲルマン諸語において、強勢アクセントが語頭に置かれた場合、相対的に語尾が弱化するため、主格と対格が形態的に区別がつかなくなることを指摘している。
- (10) ここでは、Johnのあとのカンマは考慮しない。それは、あくまでも、正書法上の問題である。
- (11) 葛西(1995: 19)を参照。
- (12) 例文は、Emonds(1976: 31)による。
- (13) 葛西(1995)は、主節現象が主節だけではなく従属節でも起こりうることを指摘し、移動現象が話し手の発話意

図の観点から論じられるべきであることを主張している。

- (14) 例文は、Emonds (1976 : 29ff) による。
- (15) ここでは、「従属節」の代わりに「従節」という術語が使用されている。
- (16) 例文は、それぞれ中尾・児馬 (1990 : 73)・Mitchell and Robinson (2001 : 64) による。
- (17) 本稿では、一致素性や時制素性が付与 (assignment) されるのか、照合 (checking) されるのかについて明確な言及はない。
- (18) 例文は、Radford (1997 : 117) による。なお、現代英語訳は筆者。
- (19) 例文は、Radford (1997 : 115) による。
- (20) 例文は、上野 (2008 : 165ff) による。なお、太字は筆者。また、この議論に関連すると思われる先行研究に Lakoff (1974) がある。
- (21) 例文は、『小学館ランダムハウス英語辞典 C D R O M 版』からのもので、他に方言に見られる副詞的用法 (certain = certainly) に言及されているが例文は記載されていない。
- (22) 上野 (2008 : 168) は、この名詞句が転換されて形容詞的に用いられた例も指摘している。
- (23) Bolinger (1977) の用語。

〔参考文献〕

- 荒木 一雄・安井 稔 [編] (1992) 『現代英文法辞典』三省堂。
- 安藤貞雄 (2002) 『英語史入門』開拓社。
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. Longman.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Clackson, James (2007) *Indo-European Linguistics*. Cambridge Univ. Press.
- Culpeper, Jonathan (2005) *History of English*, Second Edition. Routledge.
- Emonds, Joseph (1970) *Root and Structure-Preserving Transformations*. Ph. D. Dissertation, MIT. Reproduced by Indiana

University Linguistics Club.

Emonds, Joseph (1976) *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. Academic Press.

Fries, C.C. (1940) "On the Development of the Structural Use of Word-order in Modern English," *Language* 40.

葛西清蔵 (1980) 「to dream a strange dream」の構造——「同族目的語」再考——『北海道大學文學部紀要』二十八・一。

葛西清蔵 (1995) 「いわゆる「主節現象」(MCP)について：心的態度の表現としての「ルート変形」(RT)」『北海道大學文學部紀要』四十四・一。

河崎 靖 (2006) 『ゲルマン語学への招待』現代書館。

Lakoff, George (1974) "Syntactic Analagams," *CLS* 10. Also published in E. Schiller et al., eds., *The Best of CLS: A Selection of Out-of-Print Papers from 1968 to 1975*. The Chicago Linguistic Society, Chicago 1988.

McIntyre, Dan (2008) *History of English*. Routledge.

Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson (2001) *A Guide to Old English*, Sixth Edition. Wiley-Blackwell.

中尾俊夫・児馬 修〔編著〕(1990)『歴史的に探る現代の英文法』大修館書店。

橋本 功 (2005)『英語史入門』慶應義塾大学出版会。

Radford, Andrew (1997) *Syntax: A Minimalist Introduction*. Cambridge Univ. Press.

上野誠治 (2008)「Googleを活用した英語の用例検索―事例研究―」『人文論集』第三十九号、北海学園大学人文学会。

上野義和〔編著〕(1997)『古英語の世界へ モルドンの戦い』松柏社。

渡部昇一 (1983)『英語の歴史』(スタンダード英語講座 [3]) 大修館書店。

(追記) 第四〇回上川・旭川地区中学校・高等学校英語科連絡合同研究会(平成二十年十一月十三日、旭川西高等学校)で、本稿の一部を発表する機会を得たが、その機会を提供してくれた石田 晃先生に感謝したい。また、査読の労を執って頂いた先生からも有益な示唆を頂いた。ここに記して感謝したい。

